

正教聖歌の伝統

第2回 使徒たち～迫害の時代—奉神礼は使徒の教会とのリンク

ハリストスと使徒たちの時代

集まって何かを歌っていた

◆福音書の記事から、機密の（最後の）晩餐のとき

「既に詠いてエレオン山に往けり。」（マタイ 26:30）ὕμνησαντες=詠う／歌う

一同は賛美の歌を歌ってから、オリーブ山に出かけた。

祈る=歌う、詠う、唱える

◆使徒経の記事から、歌の記録

「寝ぬるもの起きよ、死より復活せよ、ハリストス爾を照らさん」（エフェス 5:14）

ほかにも

フィリピ 2:11、I テモテ 3:16、6:15、II テモテ 2:11、黙示 22:17、など

歌は何度もパラフレーズされた。イメージを共有。新たなインスピレーション。

アンドレイの大カノン コンダク （聖歌者ロマン 6世紀）

「我が霊よ、我が霊よ、起きよ、何ぞ眠る、終わりは近づく、爾擾れん、故に寤めよ、在らざる所なく充たざる所なきハリストス神を宥めん為なり。」

復活祭のカノン 第3歌頌 （ダマスクのイオアン 8世紀）

「今、天と地と地獄とは皆光に満たされたり、故に万物はその固めなるハリストスの起くるを祝うべし」

やがて歌の本『八調経 Octoechos』『祭日経（月課経）Menayon』『三歌齋経 Lenten Triodion』『五旬経 Pentecostarion』などにまとめられる。8世紀以後。

◆祈りのことばを歌う（唱える）→最初は即興、『奉事経』にまとめられる。

「聖書の言に感じた者、また自分の心の底から訴えたい者は、中央へ出て、神に向かつて歌え」（カルタゴのテルトリアヌス c155~220 Apologeticus, chap.39 § 18）

◆応答、「アミン」「ア ril イヤ」「マラナタ」など—交唱（アンティフォン）、応答唱の原型

◆手紙の挨拶—今でも同じようなやりとり

「願くは我等の主イイスス・ハリストスの恩寵は爾らの神とともに在らんことを」「アミン」。

◆聖書を持ち出す、小聖入、献げて持ち出す一昔は別室に隠してあった。

◆集会の記録

「太陽にちなんで呼ばれる日（日曜日）に、町や村に住む私たちの仲間はみな一つの所に集まり、時間の許す限り、使徒の記録（使徒経）、預言者の書物（ポロキメンやア ril イヤの句）を読む。朗読者が読み終わると司会者がこれらの美しい教えを学ぶように勧め励ます話（説教）をする。それから皆一緒に立って祈る。祈りがすむと先に述べたように、パンとぶどう酒と水が運ばれ、司会者は祈りと感謝を自分に与えられた力によってささげ、皆は「アミン」と答える。（ユスティノス『第一弁明』67：3-5）

◆「聖詠と歌頌と属神の詩賦とを以て 口に唱え、心に和して、主を讃美せよ」（エフェス 5:19）（コロサイ 3:16）

聖詠 psalms 詩篇／聖詠 + 旧約聖書の歌

歌頌 hymns さんび、賛歌 イムノス（創作された歌、トロバリなど）

属神の詩賦 spiritual songs 霊の歌、喜びの歌（ア ril イヤなど）

パウロのころは区別されていない。

※後に、西方では韻文の歌がイムノスと呼ばれるようになり、東方では散文が歌われた。

◆東西共通の歌 大頌栄 Great Doxology 栄光の賛歌 Gloria

至高きには光荣神に帰し、地には平安降り、人には恵臨めり。

主天の王、神父全能者よ、主独生の子イイスス・ハリストス、及び聖神よ、爾の大なる光荣に因りて、我等爾を崇め、爾を讃め揚げ、爾を伏し拜み、爾を尊み歌ひ、爾に感謝す。主神よ、神の羔、父の子、世の罪を任ひし者よ、我等を憐み給へ、世の諸の罪を任ひし者よ、我等の祷を納れ給へ。父の右に坐する者よ、我等を憐み給へ。爾は独聖なり、爾は独主イイスス・ハリストス、神父の光荣を躡す者なればなり、「アミン」。

◆集まること一奉神礼の中で神と出会う

「二人、または三人がわたしの名によって集まるところにはわたしもその中にいる（マタイ 18:20）」

日常と異なる場所、異なる服装、異なる「話し方」＝歌う